

地域と協同の 研究センターNEWS

2022年11月25日発行

219号

小・中・高での「読書の習慣」と大学生の読書時間、および「人間の幸福」

上掛利博（京都府立大学名誉教授）

1. 福祉（人間の幸福）の土台に必要な「教育」「仕事」「住宅」

私は「人間の全面発達を社会的に保障する福祉」という視点から、福祉（幸せ）の土台には「教育」（人づくり、生涯学習）、「仕事」（生きがい、やるべきこと）、「住宅」（居場所、自然環境）が不可欠だと主張してきました（上掛ほか編著「社会福祉講座」①『福祉を創る』、②『老人福祉を創る』、③『地域福祉を創る』、④『障害者の未来をつくる』、⑤『福祉都市を造る』、1989～93年、かもがわ出版、他）。くわえて、社会制度としての「地域コミュニティ」（住民自治、民主主義）や人間相互の「つながり」（仲間、隣人）も重要だと考えています。ここでは「教育」の基礎にある「読書の習慣」を取り上げます。

2. 日本の大学生に進行する読書時間の「両極分解」

全国大学生協連の学生生活実態調査で、2018年に「1日の読書時間が〇分」という大学生が半数近い」という結果が発表され衝撃を受けました。学生の読書時間の平均は1日30分で、48%が読書時間「0分」だった一方、「60分以上」が27%いました。つまり、読書を「する学生」と「しない学生」とが分かれているので、「0分」をのぞいた平均では60分でした。

この調査は、大学入学前の読書時間についても質問していて、小学校高学年で読書を全くしなかった人は16%、中学で21%、高校で31%。一方、小学校高学年では54%が1日に30分以上読書をしていたのに、高校で30分以上読書をした人は33%まで減っています。すなわち、小学校高学年が読書時間のピークで、中学、高校と読まない人が増えていき、高校時代に全く読書をしなかった人の73%が、大学生になっても読書をしていないことがわかりました。

ちなみに、2022年3月発表の調査（30大学、10,813人）では、①1日の読書時間（電子書籍も含む）「0分」は50.5%で、前年から3.3ポイント増加、②平均は28.4分（前年▲3.7分）、「0分」をのぞいた「読書する学生」の平均は58.9分で、前年より4.1分減少、③「30分～60分未満」11.4%（前年▲1.0ポイント）、「60分～120分未満」18.6%（同▲0.8ポイント）、「120分以上」7.2%（同▲1.4ポイント）。この10年では、「0分」が36.7から50.5に増加したのに対し、対極の「60分～120分未満」は14.9から18.6へ増加、「120分以上」も5.6から7.2へと増加するなど「両極分解」は進んでいます。

では、「読書の落ちこぼし」をうまないためには、どうすればよいでしょうか？ 【2ページにつづく】

研究センター11月の活動

1日（火）三河地域懇談会世話会・名城大学人間学部「ボランティア入門」⑦	15日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑨
3日（木）組合員意識調査セミナー準備研究会	17日（木）金城学院大学「協同組合論」⑦
5日（土）三河地域懇談会・金城学院大学「協同組合論」商品検査センター見学	18日（金）JCA協同組合連合会全国交流会議
8日（火）第6回常任理事会・名城大学人間学部「ボランティア入門」⑧	19日（土）第5回共同購入事業マイスターコース・第11回友愛・協同セミナー
第6回ウクライナ被災者支援財団共有会議	22日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑩
10日（木）金城学院大学「協同組合論」⑥・岐阜地域懇談会世話会	24日（木）金城学院大学「協同組合論」⑧
11日（金）第6回協同の未来塾	25日（金）尾張地域懇談会世話会
12日（土）「飛騨市」より「やなマルシェ」訪問	29日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑪
14日（月）「全国協同組合等研究組織」情報交換会	30日（水）第7期協同の未来塾修了者実践交流会

※ 各行事は新型コロナウイルス対策をとって実施しています。

目次	小・中・高での「読書の習慣」と 大学生の読書時間、および「人間の幸福」 上掛利博	1	ウクライナ等避難民のみなさんの 長期化する避難生活支援について	4
	「味噌は作らない、育てる。」 味噌蔵見学記	3	情報クリップ	5
	「三河地域懇談会の活動」		書籍紹介	8

【1ページからつづく】

3. アメリカの小・中・高で行われている「ブックバトル」

アメリカ西海岸オレゴン州（人口424万人）のポートランドで2年半暮らして帰国した孫とひさしづりに会いました。その時、オレゴン学校図書館協会が主宰するOBOB（オーボブ；The Oregon Battle of the Books）という、自発的な読書の動機付けと理解のプログラム「ブックバトル」について知りました。これは、3～5年（日本の小学校高学年）、6～8年（中学生）、9～12年（高校生）を対象として、さまざまなスタイルや視点を有す質の高い文学に触れることで、読書への関心を広げて読解力を高め、生徒の間の共同学習とチームワークを促進する取り組みとして、2007年に始まり2016年には334校が参加しています。

具体的には、クラス毎に1チーム4人で集まり（小4の孫のチームは、インド系女子、中国系女子、白人男子、日本人男子；本気が5チーム、遊びが2チーム、やらない子が数人）、毎年「ブックバトル」用に示されるリスト（小学校高学年は15冊＋生徒の希望1冊、中学16冊、高校12冊の3区分）の本を、夏休みから冬にかけて各自で読んで（最低でも担当の4冊、平均で半分、なかには全冊読む子も！）、クラス代表チームをバトル（リストにある本についてのクイズ大会）で決め、さらに学年代表チームを選び、2月末までに小・中・高の3区分について学校代表を決め（孫の小4代表チームは、最高学年の小5代表チームに勝ちました）、3月に地区大会で戦うという段取りです。その間に、チームで集まって熱心に練習もやります。

クイズは、1セット16問で「登場人物に〇〇というニックネームがついている本は？」「登場人物がゴミ箱に隠れて監獄から脱出する本は？」「〇〇の家族は、台湾からアメリカのどの都市に引っ越してきましたか？」「〇〇の主人公はどんな病状を持っていますか？」などが出題されます。リストにあるのはどんな本か、小学校高学年用から日本で翻訳されている本を紹介すると下記の3冊（どの本も200頁以上）。全体的には、障害のある子どもや移民の子どもが多く取り上げられているのが特徴です。

(1) リンダ・マラリー・ハント『木の中の魚』（講談社、2017年）；「難読症」（ディスレクシア）のために自信を失っていた少女が、新任の先生の理解や型破りな仲間たちとの友情によって成長するという話で、現在中1と小4の孫が二人とも1番面白かったという本。

(2) キャサリン・アップルゲイト『願いごとの樹』（偕成社、2018年）；昔からあらゆる国の移民を受け入れてきた町にある樹齢216年の木と、最近引っ越してきた少女との希望に満ちた物語。

(3) ジャック・ギヤントス『ぼく、カギをのんじゃった！』（徳間書店、2007年）；いつも考えるより先に行動して騒ぎを起こし「問題児」だと思われていた小4の男の子が、支援センターで治療を受けて考え方や行動を自分でコントロールできるようになり個性をひらかせるという話。

4. 『読書のいずみ』を活用する大学生協の役割

日本の大学生の読書に関して、大学生協の書籍部に置いてある『読書のいずみ』（2022年秋号）を見ると、巻頭は『夕暮れに夜明けの歌を』で評判の奈倉有里さん、特集は「八咫烏シリーズ」が10周年を迎えた阿部智里さんと学生の対談、「わが大学の先生と語る」は京都大学の菊池暁先生（民俗学）、大学4年間で100冊読む「読書マラソン」で好評な20冊の紹介（白木夏子『ファッションの仕事で世界を変える』ほか）、「私の押し本」の特集（宇佐美りん『押し、燃ゆ』、上橋菜穂子『香君 上・下』ほか）と多彩な本が紹介されていることからわかるように、編集メンバーの院生・学生の工夫で毎号楽しみな冊子です（72頁）。

生活が大変でアルバイトに忙しく読む時間がないとか、スマホ代が高くて本を買うお金がないなど理由は様々ですが、学生の中に「本を読む人と読まない人の両極分解」が起きている現実に変化を起こすには、例えば『読書のいずみ』が届いていない学生への配布（配信）を通じて情報を届けることが必要でしょう。

また、向井和美『読書会という幸福』（岩波新書）が示すように「読書会」という交流の場を設けることで、一人で読むのとはまた違う仲間とのコミュニケーションを豊かにして「読書の習慣」を身につけることを通じた「人づくり」を進めることが、「幸せな人生」（＝福祉）に求められるのではないのでしょうか。

（かみかけ としひろ）

「味噌は作らない、育てる。」味噌蔵見学記

《三河地域懇談会の活動》

10 月 18 日（火）

報告：伊藤小友美（事務局）

三河地域懇談会では、今年度は「地域と地域の食文化（次世代へ伝え継ぎたい三河の伝統食）」を活動のテーマのひとつに掲げています。三河の伝統食ということで、豆味噌について学び、伝統食である「煮味噌」について交流することを目的に、10 月 18 日、「のだみそ株式会社」（今年 7 月、合資会社から株式会社へ変更）を 10 名で訪れました。ゆったり時の流れる味噌蔵の中で、野田清衛社長の味噌への思い、平和への思いをたっぷりお聞きすることができました。長年、食育に取り組んでいる野田社長は、小学生～大学生、大人の見学を受け入れており、月一回「みその学校」も開催しておられます。三河地域懇談会としても久しぶりのフィールドワークでした。お聞きしたお話の概要と参加者の感想を報告します。



味噌はシンプル 廃校になった新城の小学校の机・椅子を並べた蔵の森小学校で聞く味噌の話

豆味噌の材料はシンプルで、大豆、塩、豆麴のみです。1300 年前、奈良時代、味噌という言葉がない時代に、「し」とか、「くき」という名前と呼んでいました。豆編に支えるという字（鼓）を書きます。「曾」は折り重なるという意味があり、木が折り重なったのが木曾。味噌は味が折り重なったものです。今食べている「味噌汁とご飯・漬け物」というスタイルができたのは江戸時代。それまでは汁と飯は「いっしょくた」に食べていました。

オルゴールのやさしい音色の中、海軍航空隊岡崎飛行場の格納庫だった蔵に林立する桶 400 本

「のだみそ」は、昭和 3 年の創業以来、18 ヶ月以上の木桶仕込みによる天然醸造の味噌を守り続けています。桶は漏ったらだめで、そのためには使い続けなくてははいけません。空けたらすぐ入れることです。死ぬまで使い続けることが長生きのひけつです。息子の結婚式のために、大桶を移動させたら裏に銘があり、元治 2（1865）年の桶だとわかりました。実は、この桶は品評会で必ず一等賞をとった桶です（写真右）。



コロナで学校給食がなくなり、味噌の需要も減って困っていたら、全国の方々が学校給食用の味噌を買って助けてくださいました。学校給食用の味噌は「子どものみそ」として販売することにしました。コロナも悪いことばかりではありません。

四代目（愛知に 3 分の 1、東京に 3 分の 2 で仕事上の息子）の新しい取り組みとして、委託を受けてイナゴと米麴と塩を漬けたものの仕込みが始まり、今、桶の中で熟成中です。昆虫発酵食品です。メロンの香りがしていました。コオロギのものもあります。



夏に蔵を訪れる方も多くなりました。ある年、元海軍航空隊の整備士さんが訪れて、「最後の 3 日間ここにいて、玉音放送を聞いたんです。」と言われたこともあります。歴史を伝える場として大切にしたい、ここで話をすることに意義があると思っています。



参加者の感想より

○野田社長の話の中に、「もうやいこ」という言葉があり、みんなが協力しあうということと教えていただきました。長く協同組合で仕事をし、地元でも市民自治の活動に参加していますが、あらためて協同とつながって考えてみたいと思いました。いちばんの収穫でした。

○あの暗い蔵の森小学校は、落ち着いた気分で話を聞ける場所でした。小さな机といすを懐かしく思いました。150 年前の桶があり、日本の文化だと感じました。また他の桶から古い歴史が見えるのでおもしろいと思います。気持ちのいい見学会でした。

○日本の戦争中のお話を聞き、ウクライナの状況にも思いを馳せる時間になりました。副社長（野田社長の奥様）麻規子さん手作りの煮味噌（写真右）と味噌汁、世話人の池戸さん手作りの郡上の新米のおにぎりをいただき、あらためて味噌文化について交流・懇談できました。貴重な経験となりました。

※煮味噌研究会を 12 月 20 日（火）、開催します。参加希望の方は事務局までご連絡ください。

ウクライナ等避難民のみなさんの長期化する避難生活支援について

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

出入国管理庁によると、11月9日現在でウクライナ避難民入国者数は2,108人となりました。愛知県は80人、岐阜県は14人、三重県には3人が避難しています。ウクライナ難民の受け入れ自治体の訪問、個別訪問を引き続き継続していますが、このところは経済的な不安が聞かれるようになりました。ウクライナに残る家族に仕送りをしている人もいます。すでにパートで就労している人の中には、ダブルワークを希望している人もいます。愛知県が実施したアンケートや日本ウクライナ文化協会のヒアリングによると、冬が近づいてきたことから防寒対策として暖房や衣料品のニーズの声が聞かれています。避難している人の多くは、日本国内に暮らす家族を頼って避難してきました。避難後は、その家族の自宅に同居をしている人が多く、しかし、避難生活が長期化する中で、経済的な負担や、人間関係のストレスが増大しているケースも複数あり、就労先での人間関係に関する相談もあります。避難直後の緊急の時期が過ぎ、実際の生活、日常の中で出てくる経済的な問題や人間関係に関する問題が増えてきています。

一方で、避難者の中でも比較的年齢が若い方たちは日本語が上達し、日本語のみでコミュニケーションをとることが可能なほどになっています。就労先で役割を担い、活躍している方もいます。1人ひとりの状況を把握し、その人を取り巻く地域や自治体とコミュニケーションをとりながら、必要な支援を提供できるようにしていきたいと考えて、訪問を続けています。

11月9日、研究センターではポーランドのワルシャワで、草の根支援を中心としてきた協同組合関係者から学ぶ場を持ちました。現地で活動するマルセリナさんには、8月7日に開催したセミナーでも報告をいただきました。それから3ヶ月が経過し、その後の様子を報告いただきました。緊急支援の時期からの変化として、ウクライナ難民自身が、それぞれができることを生かして、参加型の自助的な活動を始めたこと、物理的なサポートや、グループ形成をするためのワークショップを行うためには活動拠点が必要であるという気づきがあり、ようやく場所を確保、契約することができたとの報告でした。

- ・大切にしているのは、助けてあげるのではなく、同じ土台に立ってサポートをするということ。大学の心理学部と連携をして、物理的なサポートと心理的なサポートのニーズを把握する調査を行っていること。
- ・場所を提供し、行政とのやり取りのサポートをしながら、ウクライナ難民の人たちの願いを支え、それを叶えることのサポートをしている。
- ・心理的社会的サポートとして、編み物ワークショップをしたり、ウクライナの兵士のために暖かい服を作ったりしており、一緒に取り組むことでグループやコミュニティが形成される。共に作業をする中で、お互いのことを話し合いながら相談ができる。
- ・グループが協力して活動を推進していくためには共通の高い目標があることが必要。単にお金を稼ぐというだけではできない。

ご経験の報告は、日本での支援活動にも大きなヒントになるようなお話でした。

オンラインで参加された方達は、地域で協同の活動をしている人、難民支援を専門に行なっている人、ロシア駐在経験がある人、アフガニスタンからの退避者の方、と多様でした。いただいた感想をいくつか紹介します。（英語で書かれたものは、参加者からマルセリナさんへのメッセージです）

- ・マルセリナさんのお話を聞いて『同じ（共通点）が多いなあ』と感じた。『誰かを救いたい、誰かのために何かをしてあげたい、しなければならない』この思いは世界共通。
- ・一般的なボランティア活動から持続可能な支援活動を追求するとき、事業づくりや組織づくりが重要になってくる。言い換えれば、みんなで必要な事業（活動）を行い、人と人のつながりを広げ、活動（事業）の継続に必要な「費用」を作り出す必要が出てくる。これこそ、COOP（協同組合）の基本、と改めて思い起こすことができた。
- ・内容の濃い、インスパイアされる内容だった。難民による難民の支援や、インテグレーションセンターの将来の可能性など、日本の難民支援でも目指したい方向性についてのイメージが広がりました。
- ・All your information motivated me to take an action for my future life.

I understand how important to support the organization/ network of refugees in themselves and set the purpose. Also you told that the refugees with trauma are getting better by supporting someone. As I learned those from you, I will do what I can and what they require. I hope any kinds of supports will be provided to you continuously.

マルセリナさんには3月7日開催する愛知県立大学と研究センターとの共催セミナー12回目でその後の展開についてご報告いただきます。ぜひご参加ください。

地域と協同の研究センターでは名古屋難民支援室、アジアボランティアネットワーク東海と共同して12月3日10時から、生活文化会館で地域に暮らす難民の方達への食料発送を行います。発送する食料は11月28日、29日、30日、12月1日、2日に生協生活文化会館で集めます。難民緊急食料支援、会員の皆様のご協力、ご参加よろしくお祈いします。

（かんだ すみれ）

情報クリップ

co-opnavi 2022. 11 No. 846

若い世代が主体的に関わる平和活動

日本生活協同組合連合会 2022 年 11 月 A 4 判 36 頁 367 円 (消費税込)

＜コープのある風景 パルシステム神奈川＞

パルシステム事業部

横須賀センター 供給リーダー 片山翔太さん

特集 若い世代が主体的に関わる平和活動

＜今日も笑顔のコープさん 生協の仲間のお仕事拝見＞

生協しまね 荒木佑介さん

＜想いをかたちに コープ商品＞

CO・OP めっちゃ長いトイレトーパー

＜生協大好きママコブ山さんの 教えて！CO・OP 商品＞

CO・OP 和歌山県産 梅のソーダ

＜ネクストブレイク CO・OP 商品＞

CO・OP 風味豊かな発酵バターのショートブレッド

＜組合員に支持される店づくり・売場づくり＞

こうち生協

＜みんなで学ぼう！店舗における衛生管理＞

生協コープかごしま

＜日本全国 宅配現場におじゃまします！＞

エフコープ

＜後方支援のお仕事紹介！組織を支える縁の下の力持ち＞

コープデリ連合会

＜SDG s REPORT＞

コープさっぽろ

＜明日の暮らし ささえあう CO・OP 共済＞

コープさが生協

＜この人に聴きたい＞

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 教授

渡邊英徳さん

＜ホットnavi＞

コープデリにいがた / 生活クラブ連合会

月刊 J A 2022. 11 vol. 813

第 29 回 JA 全国大会決議の実践に向けて⑨

全国農業協同組合中央会 2022 年 11 月 A 4 判 48 頁 年間予約 5,204 円 (消費税込)

特集 第 29 回 JA 全国大会決議の実践に向けて⑨

－持続可能な経営基盤の確立・強化について

JA 全中 JA 経営対策部 経営基盤強化対策課

J A 自己改革の進化

地域農業の振興と組合員の意思反映

－J A かながわ西湘（神奈川県）の取り組み 阿高あや

きずな春秋 —協同のこころ—

童門冬二

展望 J A の進むべき道

令和 4 年度 J A 営農・経済担当常勤役員・幹部

職員研修会を終えて（第 8 回 J A 営農・経済フォーラム）

脇岡弘典（J A 全中常務理事）

「国産国産」に向けて 第 8 回

再び食料自給率向上を目指す中国

阮 蔚

J A グループと SDG s 第 8 回

コロナに負けず果敢に攻め 6 次化を絡めて産地の基礎固め

久米千曲

協同組合の広場

（日本生協連 J F 全漁連 全森連 生活クラブ連合会）

研究者からの提言 第 8 回

地域の食べものがたり

－ローカル・フード・ストーリーの可能性

湯澤規子

トピック

「J A アグリタウン」の取り組みについて

J A 全中 広報部

海外だより [D.C. 通信] 第 137 回

秋の恵みに感謝する

菅野英志

令和 3 年度 J A 経営マスターコース優秀論文紹介

終了論文大賞

化学肥料、農薬を提案しない J A

細川明秀 / J A 高知県（高知県）

生活協同組合研究 2022. 11 VOL. 562

飲用水をとりまく状況

公益財団法人 生協総合研究所 2022 年 11 月 B5 判 80 頁 定価 550 円 (消費税込)

巻頭言

有機・アニマルウェルフェア畜産における産業化と可視化

大木 茂

特集 飲用水をとりまく状況

改正水道法によって始まる水道事業の再編

—広域化の問題を中心に—
水ビジネスと民営化の問題点
日本の水道水は安全か？
地下水の特性と利用、および課題
飲料水としての海洋深層水利用の現状と展望
アクアクララみやぎ生協の水宅配事業について

梶原健嗣
内田聖子
山室真澄
中川 啓
高橋正征

山内治郎・白石正文・(聞き手) 鈴木岳
「給水スポット」で環境負荷の低減と魅力的なまちづくりへ
—水 Do! と Refill Japan の展開—

瀬口亮子・(聞き手) 鈴木岳
コラム 日本にもある天然炭酸水

■研究と調査

特定地域づくり事業協同組合制度の可能性と課題

森谷久子

■国際協同組合運動史 (第8回)

国際協同組合同盟 (ICA) 第5回マンチェスター大会
鈴木岳

■本誌特集を読んで (2022・9)

米山高生・安藤信雄・岡本一郎

■研究所日誌

●公開研究会 (オンライン)

フランスとデンマークの協同思想より学ぶ 12/8

●2022年度生協総研賞

・第20回助成事業対象者決定のお知らせ

文化連情報 2022.11 No.536

厚生連オンラインカレッジが厚生連職員教育研修の良きパートナーとなることをめざして

日本文化厚生農業協同組合連合会 2022年11月 B5判 96頁 文化連情報編集部 03-3370-2529*注

農協組合長インタビュー (85)

支店は集い寄り添う協同組合の拠点

富野井利弘

厚生連オンラインカレッジが厚生連職員教育研修の

良きパートナーとなることをめざして

伊藤幸夫

院長インタビュー (337)

地域完結型医療の中核として、

受診・紹介・働いて「良かった」が目標
石田和史

二木教授の医療時評 (206)

地域共生社会の理念と実現、

および地域包括ケアとの異同

二木 立

むかしのくらしを見て！触って！体験する！

「JA みえなか郷土資料館」

藤原健太郎

農福連携も見据えた

運動器の疾患予防・疼痛軽減のための対策集 (3)

運動器疾患予防・軽減のための運動メニュー

上岡洋晴

食から考える現代資本主義社会 (6)

日本のアグリビジネスと食糧自給率

～明治期から輸入原料を活用してきた商社と

大手食品企業群の影響は

平賀 緑

アメリカの医療政策動向 (27)

4回目のオバマケア違憲訴訟？

—予防サービス給付をめぐる

連邦地裁判決とその影響

高山一夫

変わる日本のまちづくり (29)

薬局・薬剤師が支える地域の健康づくり

—ふれあい・いきいきサロン萬々 (青森市) —

杉岡直人 ・ 畠山明子

ドイツの対 COVID-19 戦略

パンデミック3年目の秋の感染症対策

吉田恵子

国民が安全安心に暮らせる社会の構築 (12)

一人暮らしの女性たちがつくる共同体

—女性生活文化空間ビビ協同組合

友岡有希

多様な福祉レジームと海外人材 (54)

ロシアの隣国エストニアの今

安里和晃

臨床倫理メディエーション (61)

医学的無益性

中西淑美

全国統一献立

新潟県の郷土料理 半身揚げ風唐揚げ

吉田涼子

アフガニスタンから見た世界と日本 (30)

戦争犯罪、騙された兵士の癒されない心の傷

レシャード カレド

デンマーク&世界の地域居住 (160)

鹿児島県肝付町の対話による地域づくり①

松岡洋子

熱帯の自然誌 (80)

太古のボルネオ島で脚の切断手術

安間繁樹

◆第26回厚生連病院と単協をつなぐ

医療・福祉研究会 開催のお知らせ

□自著を語る

増進型地域福祉への展開 / 朝倉美江

□書籍紹介 農村における農的な暮らし再出発

□書籍紹介 人間の尊厳と個人の尊重

▼線路は続く (169)

城北線で夢の実現を / 西出健史

▼最近見た映画 デリシュ！

/ 菅原育子

生協運営資料 2022. 9 No. 327**深刻化する地域の課題に取り組む団体を****生協の事業・活動を通じて支援する**

日本生活協同組合連合会 2022 年 9 月 B5 判 84 頁 886 円（送料別）

巻頭インタビュー**●わが生協、かくありたい！**

生協の最大の目的は地域や組合員の役に立つこと。

今後も地域内のつながりを強化していく。

コープこうべ●組合長理事 岩山利久氏

特集**深刻化する地域の課題に取り組む団体を****生協の事業・活動を通じて支援する**

1 日本の人口動態と地域を支える生協への期待

内閣官房●全世代型社会保障構築本部事務局

総括事務局長 山崎史郎氏

2 次世代型組織づくり

関係人口概念や地域実践事例の視座から

島根県立大学●地域政策学部 准教授

田中輝美氏

3 子ども食堂やフードドライブなどに取り組む

地域の団体を商品の提供・供給を通じて支援する

ララコープ●執行役員 総合企画本部 本部長

詫摩孝一氏

総合企画本部 経営企画部 統括マネージャー

浦岡克治氏

4 多世代共生施設の店舗へ商品を提供し、

地域とも連携しながらコミュニティの再形成を目指す

社会福祉法人桑名市社会福祉協議会

●多世代共生課 ナーシングセンター 千種隆昌氏

コープみえ●執行役員

甲斐淳一氏

桑名センター センター長 宮崎清文氏

組織活動部 部長

妹尾成幸氏

桑名センター 地域活動スタッフ

渡辺昌子氏

連載**●これからの店舗事業を考える**

第 32 回

「くらし提案型店舗」に転換し

地域に貢献できる店舗事業の実現を目指す

コープやまぐち●常任理事 店舗 生活事業管掌

太田高志氏

特別企画**少子高齢化が進む地域のコミュニティを****維持・発展させる**

秋田県●あきた未来創造部 地域づくり推進課 課長

小原友明氏

あきた未来創造部 地域づくり推進課 副主幹

松倉和美氏

表紙の写真

桑名市社会福祉協議会とコープみえの

「地域共生社会の実現に関する連携協定書」調印式。

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

熊崎辰広会員からの書籍紹介



「増進型地域福祉への展開—幸福を生みだす福祉をつくる」

編著：小野達也、朝倉美江 出版社：同時代社、出版日：2022年8月31日

頁数：281 価格：2750円（税込み）

目次	基礎編	序章 幸福を生み出す地域福祉へ	第一章 増進型地域福祉の考え方
		第二章 増進型地域福祉がつくる福祉文化	
	実践編	第三章 認知症の人が支えられる側からまちづくりの主人公へ	
		第四章 福祉施設の増進型福祉への取り組み	
		第五章 住民が作り出す増進型地域福祉	
		第六章 行政による増進型地域福祉の取り組み	
		第七章 地域共生社会の実現に向けた増進型地域福祉の推進	
		第八章 ワーカーズ・コレクティブ運動、協同労働がつくる増進型地域福祉	
	研究編	第九章 地域包括ケアシステムと増進型地域福祉	
		第十章 増進型地域福祉と居住福祉	
		第十一章 プレイス・ベースド・アプローチと増進型地域福祉	
		第十二章 社会連帯経済と増進型地域福祉	
		第十三章 多文化共生と増進型地域福祉	

おわりに

熊崎辰広会員からの紹介

「増進型地域福祉」をどのようなものとして理解できるかが、この本を理解する鍵となっています。小野氏は増進型地域福祉の5つの特性を上げています。①福祉の実現をめざす。②問題解決ではなく目的実現型。③合意形成型で対話的行為に基づく。④実現のためのプロセスの価値。⑤個人の生涯的成長・自己実現と地域社会の継続的発展の統合。「基礎編」で示されたこの視点が、次の実践編と研究編で具体的に学ぶことができます。

実践編のなかでは「ゆめ伴プロジェクト」「好きやねん御池台」といった街づくり、また増進型地域福祉課をもつ大阪富田林市の行政、ワーカーズコープ等協同労働の報告のなかに、それぞれ増進型地域福祉の豊かな展開が示されています。研究編では「地域包括ケアシステム」「居住福祉」「居場所づくり（プレイス・ベースド・アプローチ）」「社会的連帯経済」「多文化共生」の各テーマが増進型地域福祉の関連のなかで論じられています。

編者の朝倉氏はつぎのように指摘しています。「人々は地域の自然、歴史のなかで、偶然出会った人々と共通するニーズを解決するために協同でサービスを創り、支え合って生きている。そしてそのプロセスのなかで、ともに夢と希望を語り、試行錯誤し、一人ひとりの幸せと地域の幸せを協同によって生み出し、その地域の福祉文化を育み、伝えつづけていくのが増進型地域福祉である」

地域と協同の研究センター12月の予定

- 1日（木）金城学院大学「協同組合論」⑨
- 2日（金）第2回組合員理事セミナー
- 3日（土）難民食糧支援仕分け・発送
- 4日（日）「多文化社会と協同組合懇談会」
- 5日（月）三河地域懇談会世話人会（豊橋生協会館）
- 6日（火）第7回常任理事会・名城大学人間学部「ボランティア入門」⑫
- 7日（水）くらしと平和・憲法を守る実行委員会
- 8日（木）金城学院大学「協同組合論」⑩
- 9日（金）愛知の協同組合間協同連絡会
- 10日（土）大規模災害に備える公開セミナー
- 11日（日）多文化連携セミナー
- 12日（月）研究フォーラム「環境」
- 13日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑬
- 15日（木）第7回協同の未来塾・金城学院大学「協同組合論」⑪
- 17日（土）東海交流フォーラム第3回実行委員会 第3回理事会
- 19日（月）研究フォーラム「地域福祉を支える市民協同」
- 20日（火）三河地域懇談会「煮味噌研究会」・名城大学人間学部「ボランティア入門」⑭
- 第7回ウクライナ被災者支援情報共有会議
- 22日（木）第3回組合員理事セミナー・金城学院大学「協同組合論」⑫
- 27日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑮

地域と協同の研究センターFacebook

下記 QR コードでご覧ください。

Facebook QR コード



※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターNEWS 第219号

発行日 2022年11月25日 定価 200円（税・送料込み）

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 鈴木 稔彦

〒464-0824 名古屋市中千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>